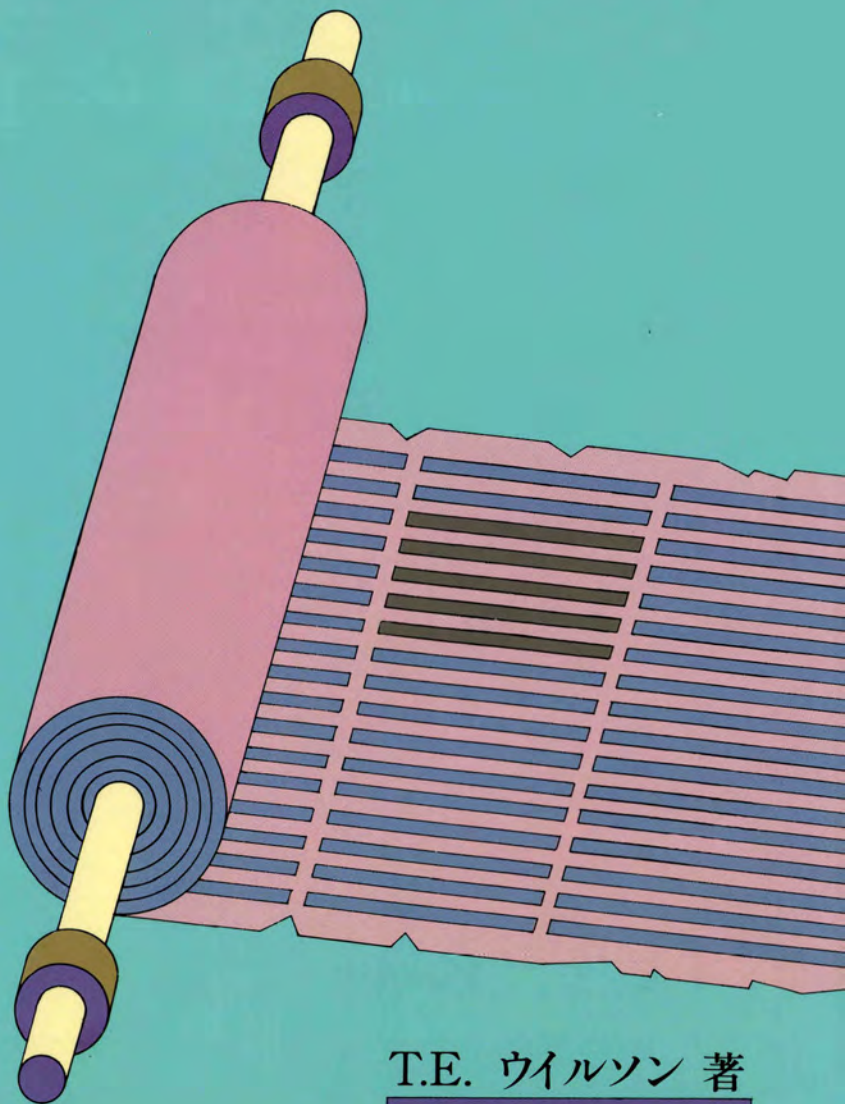


新約聖書の奥義



T.E. ウイルソン 著

新約聖書の奥義

T.E.ウイルソン著

J.B.カリー訳

伝道出版社

序 文

いずれの時代のクリスチャンも、自分のために神のみことばの真理を見出さなくてはならないと言われています。どの時代においても、その真理は同じですが、それぞれの時代に生きる信者たちの事情と必要に応じて適用すべきです。たとえば、イサクは父アブラハムが掘った井戸を再び掘り、同じ名をつけました。ペリシテ人がそれらの井戸を土でふさいだからです（創世記二六章）。新約ペリシテ人は、真理の井戸をふさぐのに余念がありません。マルチン・ルーテル、ジョン・カルヴィン、ジョン・ウエスレー、ネルソン・ダービーなどは皆、再び井戸を掘った兄弟たちです。彼らは自分の時代に対する神のみことばの意味を見出したので、みことばをその時代の信者たちにあてはめたのです。

序 文
今回の学びの目的は「奥義」と呼ばれている新約聖書の大きいなる教義を述べることです。過去において、他の人々がこの教義を記事にまとめました。しかし、新約聖書で「終わりの日」と呼ばれている今日の困難な、そして危険な特別の状況の時にも、新しくあてはめてみる必要があります。

「奥義」という言葉は旧約聖書の中には見出せませんが、「なぞ」という言葉が三回ほど現われています（詩四九・4、七八・2、箴言一・6）。新約聖書では、ギリシヤ語の「マステリオン（奥義へ秘密、秘められた、秘義と訳しているところもある）」は二十七回ほど使われています。次の箇所をしらべてみてください。マタイ一三・11、マルコ四・11、ルカ八・10、ローマー一・25、一六・25、Iコリント二・7、四・1、一三・2、一四・2、一五・51、エペソ一・9、三・3、4、9、五・32、六・19、コロサイ一・26、27（二回）、二・2、四・3、IIテサロニケ二・7、Iテモテ三・9、16、黙示録一・20、一〇・7、一七・5、7。

これら二十七回のうち二十一回までを使徒パウロが使っているのは注目すべきことです。パウロは、「神の奥義の管理者」であると自分自身を呼びました（Iコリント四・1）。

新約聖書の「奥義」という言葉は神秘的なものという意味ではありません。その実際の説明はエペソ三章4、5節にあります。「キリストの奥義……この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした」。つまり、新約聖書のさまざまな奥義は、使徒の時代まで隠されていましたが、今、神の聖霊によって聖書の中に啓示されました。「奥義」とは、人知を超えていて、神が現わさない限り、だれもわからないものです。ウイリアム・サンデーは、「ギリシヤ人の間では

『奥義』はいつも秘められたものであるが、パウロによればそれは示されたものである」と述べています。

H・A・アイアンサイドは、この主題に関する著書の中で、一般の人々には知らされず、ただ選ばれて入会した者たちだけが参加することができるとする神秘的儀式に関するギリシヤの神話を引用しながら、「新約聖書の奥義は、ただ選ばれた特別の階級の者たちだけのものではなく、すべての信者が一人のこらず自分のものとすることができる偉大な真理である」と述べています。

次の三人の著者が「新約聖書の奥義」を解釈しています。

「神の奥義」(The Mysteries of God) という著書の中でH・A・アイアンサイドは七つの奥義を記しています。

- 1、天の王国の奥義(マタイ一三章)。
- 2、オリーブの木の奥義(ローマー一章)。
- 3、キリストとその教会の偉大な奥義(エペソ三章)。
- 4、敬虔の奥義(1テモテ三・16)。
- 5、聖徒たちが空中に引き上げられる奥義(1コリント一五・51)。

文 序

6、不法の奥義（秘密）（Ⅱテサロニケ二・7）。

7、成就された神の奥義（黙示一〇・7）。

W・E・ヴァインは、その著「聖書の十二の奥義」(The Twelve Mysteries of Scripture) の中

で次のように記しています。

1、信仰の奥義（Ⅰテモテ三・9）。

2、キリストの神性の奥義（コロサイ二・2、9）。

3、敬虔の奥義（Ⅰテモテ三・16）。

4、福音の奥義（エペソ六・19）。

5、神の王国の奥義（マタイ一三・11、ルカ八・10）。

6、七つの星と七つの燭台の秘められた奥義（黙示録一・20）。

7、聖徒たちの体が変わえられる奥義（Ⅰコリント一五・15）。

8、イスラエル人がかたくなになつた奥義（ローマー一・25）。

9、バビロンについての奥義（黙示録一七・5）。

10、不法の奥義（Ⅱテサロニケ二・7）。

- 11、神が定めたさばきの奥義（黙示録一〇・七）。
- 12、神のみこころの奥義（エペソ一・九）。

ウイリアム・ホストはその著「新約聖書の奥義」(Mysteries of the New Testament)で、九つの奥義を二つの部類に分けて述べています。

神性の奥義

- 1、王国の奥義（マタイ一三章、マルコ四章、ルカ八章）。
 - 2、イスラエルがかたくなになつた奥義（ローマー一・25）。
 - 3、空中再臨の奥義（1コリント一五・51）。
 - 4、「キリスト」という偉大な奥義（ローマー一六・25、エペソ三章〜五章）。
 - 5、敬虔の奥義（Iテモテ三・16）。
 - 6、神の奥義（黙示録一〇・7）。
 - 7、すべてのものの頭であるキリストの奥義（エペソ一・9、10）。
- サタンの活躍の奥義
- 8、不法の奥義（IIテサロニケ二・7）。

9、バビロンの奥義（黙示録一七・5）。

新約聖書の奥義に関するものすべてを調べてみると、少なくとも十四ぐらい示されているようです。この十四の奥義は、「教理的な奥義」「時代的な奥義」「献身的な奥義」「悪魔に関する奥義」に分類されます。この十四の奥義は、使徒たちの教えのおもな教理でありテーマです。

このたびの学びでは、次の順序に従って考えてみましょう。

教理的な奥義

- 1、信仰の奥義（Iテモテ三・9）。
- 2、福音の奥義（ローマ一六・25、エペソ六・19）。
- 3、ユダヤ人と異邦人が一つのからだになる奥義（エペソ三章）。
- 4、キリストの花嫁の奥義（エペソ五・32、黙示録一九、二〇章）。
- 5、七つの星と七つの教会の奥義（黙示録一・20）。
- 6、敬虔の奥義（Iテモテ三・16）。

時代的な奥義

- 7、天の御国の奥義（マタイ一三章）。
- 8、イスラエルがかたくなになつた奥義（ローマ一・25）。
- 9、携挙の奥義（Iコリント一五・51）。
- 10、神のみこころの奥義（エペソ一・9）。
- 11、神の奥義（黙示録一〇・7）。

献身的な奥義

- 12、信者に内住しているキリストの奥義（コロサイ一・24〜29）。

悪魔に関する奥義

- 13、不法の奥義（IIテサロニケ二・7）。
- 14、大バビロンの奥義（黙示録一七、一八章）。

目次

教理的な奥義

- | | | |
|---|----------------------|----|
| 1 | 信仰の奥義 | 13 |
| 2 | 福音の奥義 | 21 |
| 3 | ユダヤ人と異邦人が一つのからだになる奥義 | 33 |
| 4 | キリストの花嫁の奥義 | 48 |
| 5 | 七つの星と七つの教会の奥義 | 63 |
| 6 | 敬虔の奥義 | 74 |

時代的な奥義

- | | | |
|---|---------|----|
| 7 | 天の御国の奥義 | 91 |
|---|---------|----|